

男女平等推進
from
むさしの

まなこ

コロナ禍の 家族関係



コロナ禍で露呈した日本の弱さ P.2
市民インタビュー コロナ禍の生活の変化や家族関係についてお聞きしました P.2
今までの、男と女にまつわる「べき」から脱しよう P.5

コロナ禍の 家族関係

コロナ禍で求められた「ステイホーム」。
在宅時間が長くなったことで、家族の関係にも変化が生じています。
それぞれが今感じていることや、
社会で起きていることについて考えてみました。

コロナ禍で露呈した日本の弱さ

女性の被害者支援に30年にわたって携わってきた遠藤さんに、
相談の現場から見えてきたコロナ禍における支援の変化や実態について伺いました。

コロナ禍でどのような変化がありましたか

危機的な状況ですね。仕事がなくなったり、という相談は顕著に多くなりました。コロナ禍で直撃を受けているのは、圧倒的に非正規、ひとり親世帯、若年女性などの社会的弱者です。東日本大震災の時にもそうだったのですが、社会が通常の時にどのくらい弱いのかというのが露呈するのです。実際日本社会は極めて弱くなっています。賃金が低い非正規の率も高く、男女差別もあり、若年層に対する性的搾取も横行している。これだけ

の因子がそろっている状況なので、非正規と女性という要因が重なる大変辛い状況になります。今までは日本はこのような状況に目をつぶってきちんと向き合っていないので、どうしたらよいかという処方箋が書けない状態です。ずっと困っていたことがコロナ禍によって可視化されています。

家族関係では、コロナ禍で家にいることが増え、息苦しくなっている人が多いですね。若年層は親世代とは考え方や感性も違うことも多く、解雇されたり、パワハラで仕事を辞めたりすると、「根性が足りない」などと言われる全く理解

遠藤智子さん

一般社団法人社会的包摂サポーターセンター事務局長。1989年より日本フェミニストカウンスリング研究会（現：NPO法人日本フェミニストカウンスリング学会）、1999年より全国女性シェルターネットワーク局長としてDV法改正に取り組み。2010年内閣府事業「バープルダイヤル（24時間DV/性暴力ホットライン）」に参加。共著「下層化する女性たち」（勤草書房）などがある。



されないということがあります。押しつけが激しくなっています。何らかの形で親から虐待を受けて

のではないのでしょうか。コロナ禍で生活についての不安もある中で、この10万円の問題はとても大きいのです。

実施されている相談事業について教えてください

まず24時間対応の全国規模のフリーダイヤル相談「よりそいホットライン」があります。こちらは2011年に東日本大震災をきっかけに被災者の支援として始まりまし。今では、外国語での相談、自殺防止、セクシュアルマイノリティに関する相談、DV・性暴力被害に関する相談など、あらゆる相談を受けています。電話がつかなくなくて何度もかけ直すものも含

コロナ禍の 家族関係

吉祥寺に2020年に開設された相談拠点。若年女性支援に活用する



め、1日に約3万件近いアクセスがあります。大きな意味で捉えるとお金や仕事がなくなるなどによって、人々が社会から切り離されてしまう「社会的排除」や貧困も暴力の一つで、相談をしてくる人はそういう暴力を受けた人たちのだと感じています。2018年には座間の事件を受けて自殺対策のSNS相談「よりそいチャット」を始めました。そのほかに、DVに特化した電話・メールとSNS相談の「DV相談プラス」、性暴力被害に特化したチャット相談「CureTime」を運営しています。SNS相談の終点は、相談者を地域の支援者につなげることで。いくらSNSで相談をしたとしても、解決するには最終的に会うしかないんです。実際にその人が生活している場所に行って、会って、その人の問題解決を手助けするしかありません。困っている人は、何に困っているかというところが多い。誤解されやすいとか、真意が伝わりづらいとか、表現がうまくできない、人が怖いなど、自分一人では社会との関係性が持てない。それが基本にあるので、

市民インタビュー

コロナ禍の生活の変化や家族関係についてお聞きしました

2人の子どもの低学年なので、休校期間中は公園に連れ出したり、宿題のフォローをしたり、新生児のときのように長い時間一緒に過ごした。会えないママ友とのSNSでのやりとりが息抜きになった。(40代)



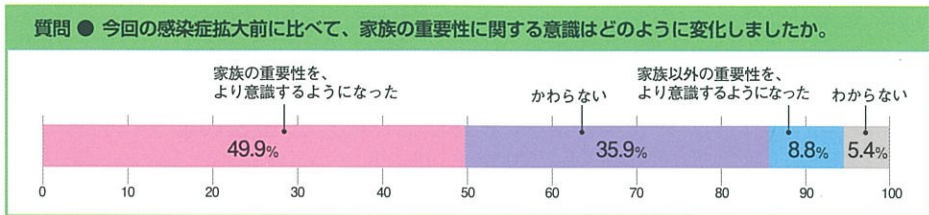
2020年4月に社会人になってから一人暮らしをしている。コロナ禍で人と会うことが難しいので、仕事のストレスをなかなか発散できない。実家にいたときは当たり前前に感じていたが、家族との会話の大切さに気付いた。(20代)



在宅勤務になったが、昼食の時間もびったり30分と決められていて、家族にも合わせてもらっている。もともと上司との関係がよくはなかったのだが、オンラインになってからは、かえって監視されているようで、プレッシャーを感じる。(40代)



小学生の子どもが「ぼくはもっと後の時代に生まれたらよかった」と言ったとき、ハッとした。(40代)



支援では困っている人の「通訳」をします。「通訳」をして社会と繋ぎ直すのです。それをしないと何も始まりません。

支援につながるには
どうすればよいのでしょうか

人は自分が困っているという自覚が生まれないと、支援につながりません。アルコール依存症になった人の自助グループなどの中で採用されている回復への12のステップというものがあるので、最初のステップは自分が無力であることを認識することなのです。お酒を目の前にしたら抵抗できない、自分はそういう人間だということを確認するところから始めるのだそうです。そのような気づきがないと、人は他人の助けを得ようと思わないんじゃないでしょうか。

今の日本は「私は困っている」という認識を持ちにくい環境です。公的な支援以外の何らかの手段を使えば食べられるという選択肢がインターネット上にも手軽にたくさんあるから。援助交際すればお金がもらえる、詐欺の受け子すればお金になりご飯が食べられる。

それに加えて、今は公に対する期待は薄くなっているのではないかと思います。

「私は困っている、そして社会は私が困ったときに健康的で文化的な最低水準の生活を与えてくれるはず」と思わなければ相談には行かない。自分たちは生きていていいのだ、生きる権利があるのだ、と思っていれば公的な相談をすると思うのですが、そこが違ってきているような気がします。

また、相談するのも力が必要で、相談できるのは30代以上が多いです。社会の中で経験を深めて、誰かとながって、困ったら聞いてもいいらしいと分かって、ようやく相談できるようになります。若い世代に権利を教えていないような国では10代20代では相談できないと思います。自分が何かを求めていいということが分からない。自己責任で頑張ってしまう。被害に遭ったことを言わせない社会、DV被害に遭っていても経済的に困窮するから離婚できない社会というのをおかしいですね。家族のあり方とかいろいろなものに対する偏見が人々を追い詰めています。被害者はどうしても自分が

悪いと思込んでしましますが、相談員は「あなたは悪くない」と伝えていきます。

今、最大の問題は若年層だと考えています。若年女性支援をするために、吉祥寺に相談の拠点を開設しました。相談者の人生を変えていくには伴走する支援者が必要です。私が生まれ育った多摩地域だったら頼れる仲間がいて一緒に活動できる。自分の人的な資源もある場所です。

困難を抱えたときにどうしたら支援につながるのか。困ったときに頼れるつながりを作ることが必要だと思っています。家族を思い起こさせる「絆」ではなく、家族じゃないつながりを社会的に認めさせることが大事ですね。自分の親族のような家族のようなものを選び直す、血が繋がった家族じゃなくてもいいのだと思えるように支援することが大事だと思います。

取材 藤田和香子/取材文 若林優香

*神奈川県座間市のアパートで2017年に起きた事件。被害者は自殺願望を抱く9人の男女を「Twitter」で誘い出し殺害した

困りごと情報提供
<https://comarigoto.jp/>



よりいホットライン
24時間、年中無休のフリーダイヤルによる電話相談
0120-279-338 (全国)
0120-279-226 (岩手県、宮城県、福島県のみ)

今までの、男と女にまつわる「べき」から脱しよう

コロナ禍での夫婦の関係や社会における男女の役割、「男らしさ」について、男性学が専門の多賀さんに伺いました。これからの時代に向けてできることについてもヒントをいただきました。

——コロナ禍での夫婦の関係についてどう捉えていますか

報道等で見ると、夫に対する妻からの声として一番多いのは、「助かる」と「迷惑」とに二分されているように思います。家事育児スキルを有しているか、携わろうという姿勢を持つ夫だと「助かる」となり、在宅時間が増えたり休校中の子どもの対応で負担も増すのに何もしない夫だと「迷惑」となるのでしょうか。問題の多くは「コロナ禍だから生じた」というより、もともと素地がありコロナ禍で「露呈した、増大した」のだと思います。また、DV相談が増えたことは深刻です。これもコロナ禍により、加害者のストレスが増し、もともとあったものを助長したのでしょうが、加害者・被害者が同じ家に閉じ込められ切実になりました。

男性中心で社会の大切なことを決めてしまつ近代社会の仕組みは、「職住分離」、つまり仕事など公的なものを男性が担い、生活や私的なものを女性が担う構造に支えられてきました。コロナ禍はそれらを揺さぶった点が多い。リモートワークは、男女共に仕事と家庭との両立をしやすくする可能性を広げました。全国転勤のせいで結婚に踏み切れなかったり、パートナーが仕事を諦めていた状況も変わるかもしれません。ただ、女性が多い職業や雇用形態、例えば介護などの福祉職や非正規雇用のほうが、リモートワークがしにくい傾向にあります。

「女がソト」だけで低収入で不安定、「男がウチ」で高収入というカッブルが増えるかもしれません。少なくとも家事をやる夫でないと女性の負担は増す一方です。

総じて、コロナ禍を機にワーク・ライフ・バランスを見直したという男性の声は多いように感じます。生活の質について考え直した人が増えたのではないのでしょうか。

多賀 太さん

関西大学文学部教授。専門は教育社会学、男性学。著書に「男子問題の時代?」(学文社)、「男らしさの社会学」(世界思想社)など。男性の生き方を問う「メンズリブ」(1990年代)や、女性に対する暴力防止の啓発に男性主体で取り組む「一般社団法人ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン」(設立・共同代表)などの活動にも携わる



——「男らしさ」とは何でしょう

時代や社会によって変わりますが、「弱音を吐くな」「大黒柱」などは象徴的です。「らしさ」に縛られ、苦しんでいる男性もいます。今でも自殺者数は男性が多いのですが、自殺動機のうち勤務や経済の問題の割合が女性に比べて圧倒的に高く、稼ぐ、養つことの重荷がうかがえます。一方、DVや性暴力は被害者のほとんどが女性です。女性が抱えるこのような問題は男性の問題でもありません。

多世代同居の身で医療職ということもあり、日常生活において気を使うことが多い。そして、同居家族にも感染対策に協力してもらっている。申し訳ない気持ちと、そういう運命だと思って受け入れてもらうしかないという気持ちが半々。(40代)



パソコンが家には1台なので、大学のリモート授業やレポート提出期限と父の会議が重なるときは調整が必要になった。また、父の勤務先の業績悪化で、今までのように大学生活が続けられるかとても不安になった。(20代)



専業主婦なので子育ては1人ですものと思込んでいて、9月に第2子を出産したときは、またワンオペ育児かと思っていた。でも夫が在宅勤務になったおかげで、平日も一緒に食事ができるようになり、子どもたちとお風呂に入ったり、遊んだり。そんな様子を見てると私にも余裕ができた。(40代)



私たち夫婦の感染予防のため、同居している息子は自分の行動を制限しており、申し訳なく思う。娘家族とは長い間会えず、妻は毎日娘や孫とSNSでたわいもない会話をしている。趣味の集まりで友人に会うことや、文化・芸術・音楽などに直接接することができない。たまには旅をしたいと思う。(80代)



夫は在宅勤務になったが、この状態に家族がなじんできた。周りでも、夫の協力で育児が楽になったという話を聞く。家族で過ごす時間が増えたことをプラスにとらえている人も多いのでは。(40代)



祖父母・母と同居していて、私は仕事から帰宅したあと祖母の介護を行っている。家族だけで介護を担うことは精神的にも負担が大きい。もし家族で1人でも感染したら、これまでのようにヘルパーさんを頼めなくなるという不安がある。(20代)



ヒューマンあい だより

◆令和2年度『まなこ』第2回サポーター会議が11月18日(水)にスイングホール10階スカイルームにて開催され、活発な意見交換が行われました。

講座レポート

●文章カトレーニング講座(全3回)～的確に伝えるコツを学ぼう～

日時>令和2年12月4、11、18日(金) 10:00～12:00
 会場>男女平等推進センター 会議室
 講師>中村泰子さん(雑誌『くらしと教育をつなぐWe』編集長)
 男女平等の視点も交えつつ、わかりやすい文章の書き方からインタビュー・取材・編集のコツまで、幅広い内容を講義いただきました。参加者同士で取材をし、その内容をまとめたインタビュー記事を講師に添削してもらうことで、文章力向上のヒントも学びました。

●母と娘のちょうどよい距離感を考える *オンライン講座

日時>令和3年1月24日(日) 14:00～15:30
 会場>男女平等推進センター 会議室
 講師>横山真香さん(母娘関係カウンセラー)
 母の期待を感じて苦しい娘、娘について自分の思いをかけ過ぎてしまう母。依存や干渉から脱出して、自分らしい生き方ができるよう考えました。

TOPICS

●Facebookで情報発信しています
 男女平等推進センター「ヒューマンあい」の取り組みを、Facebookで情報発信しています。右のQRコードからアクセスしてみてください。



●女性のための再就職支援セミナー&個別相談会

日時>令和3年2月2日(火) 13:00～17:00
 会場>市民会館集会室、男女平等推進センター 会議室
 講師>山本浩子さん(国家資格キャリアコンサルタント、認定心理士)
 相手も自分も尊重して、自分の言いたいことを伝えるアサーティブコミュニケーションの手法と一緒に学び、面接の場面、(就職後の)職場、家庭生活に活用するために学びました。

●シネマプレイス×ヒューマンあい～日曜の午後の映画会～ 映画『弟の夫』上映

日時>令和3年1月31日(日) 14:00～17:00
 会場>武蔵野プレイス 4階フォーラム

そのほかにも、
 ●男女共同参画フォーラム2020
 などを開催しました。

相談窓口のご案内 相談無料 秘密厳守

◆女性総合相談

女性が暮らしの中で抱える様々な悩みについて、女性の専門相談員がお話を伺い、解決に向けて一緒に考えます。夫やパートナーとのこと、家族のこと、職場や学校でのことなど、どんな些細なことでもかまいません。誰かに話すことで、気持ちが楽になることもあります。お気軽にご相談ください。

【相談方法】 面接・電話による相談
 【相談時間】 1回 50分/予約制

第1土曜日	①13:00～	②14:00～	③15:00～
第2金曜日	①18:00～	②19:00～	③20:00～
第4火曜日	①9:00～	②10:00～	③11:00～

◆女性法律相談

離婚・扶養(養育)・相続などの法的な対応や手続きについて、女性弁護士が相談に応じます。

【相談方法】 面接による相談
 【相談時間】 1回 30分/予約制

第1土曜日	①9:30～	②10:10～	③10:50～	④11:30～
-------	--------	---------	---------	---------

【申込み方法】 「ヒューマンあい」窓口または、電話にて予約を受け付けます。
 【予約電話番号】 0422-37-3410 (木曜・年末年始を除く午前9時～午後10時)

◆むさしのにじいろ電話相談(性的指向・性自認に関する相談) ※予約不要

セクシュアリティ全般や性的指向・性自認に関する悩み・相談に専門相談員が応じます。ご本人のみならず、ご家族や支援者の方などからの相談にも応じます。一人で悩まず、まずご相談ください。

第2水曜日	17:30～20:30
-------	-------------

【相談時間】 1人30分から1時間
 【電話番号】 0422-38-5187
 面談をご希望の方はこちらへ▶0422-37-3410

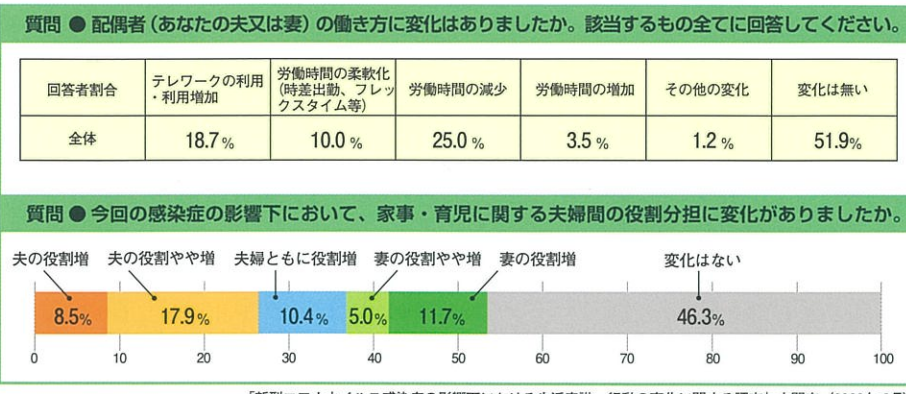
BOOKS

男女平等推進センターの蔵書から 貸し出しています!

『これからの男の子たちへ』 「男らしさ」から自由になるためのレッスン

太田啓子 著 (大月書店) 2020年

幼少期からの刷り込みで、「有害な男らしさ」は出来上がっているのではない。小学生の息子ふたりを子育て中の著者が、日常生活の中で感じる事例と分析、男の子の「呪い」を解くヒントが数多く取り上げられている。さらに、子ども達を性犯罪の加害者にも被害者にもしないために、包括的な性教育も必要と説いている。また、3人の方との対談も興味深い。男女関係なく、あらゆる世代に手に取ってほしい1冊。
 [文 島崎理恵]



「男らしさ」の呪縛から男性を解放していくことが、女性の被害を減らすことにつながるかもしれません。また、女性の職位や賃金の低さ、家事育児の負担なども、職場と家庭の両方でその改善に向けて男性が本気で取り組みをもっと変わると思っています。いまだに男性優位な社会ですが、

——今までの男女の役割、認識から変化することに戸惑いを覚える人もいるかもしれませんが、なぜ多様化しなくてはいけないと思われませんか。個人の視点で考えると、自分の生き方を自分で選択していくからで、社会的な側面では、今までのようでは社会が立ち行かなくなるからです。「男は仕事、女は家庭」という性別分業社会は、ほとんどの人が結婚する前提でないと成り立ちません。働き手が足りなくなると、女性にもより働くことが求められます。その分男性が家事育児を分担し、性別に関わりなく仕事と両立できるようにすることが、人口減少社会において持続可能であるための必要条件です。

——今この時代を生きる「男の子」のために何ができるでしょうか。完全に男女平等ではないこの世界に巣立っていくので、親としてはどう伝えるべきか難しく感じたりもしますが、男の子に、今の男女不平等や男らしさの縛りを再生産する側に回ってほしくないならば、親たちが自身が新しいロールモデルを示すことでしょうか。時には父親が弱音を吐く姿を見せる、夫婦でフラットに話し合う、性教育をするとか。メディアの影響や思春期の男子集団での「男らしさ」のプレッシャーは大きく、特に反抗期の心理状況は複雑です。頭ごなしに正論を述べるより、本人の気持ちも認めつつ、子どもとオープンに意見交換をするというのはいいでしょうか。

若い世代の男性の中には、もはや年長者たちのような「特権」が得られないのに男としての重荷を背負うことは割に合わない、と感じている人もいます。男女平等教育もあつて、最近では、既存の「男らしさ」を問い直す声をあげる男性も増えていきますね。

かど悩みや気持ちを共有するのはどうでしょう。悩んでいるのは自分だけじゃないと知ること、ストレスを軽減できると思います。退職してからの友人づくりや地域活動デビューは難しいです。労働時間を減らして、趣味や子育てを通じた出会いなどにより、日頃から仕事以外の人となりがあっていいと思います。

外出自粛期間中は家族がかわるがわる散歩に行きたがったので、むしろ外出の機会が増えた。(5歳)

在宅勤務期間は小学生の子どもと一緒に散歩に行くことを日課にしていた。中学生の子どもたちは思春期で、友達や部活が一番大切な時期なのに何もできず、苦しそうだった。親として何もしてやれず、もどかしかった。(40代)

夫婦とも週に2～3日程度、在宅勤務をするようになった。仕事量は変わらないのだが、在宅＝休みのような気がしてしまう。通勤時間がない分、在宅している相手に家事負担を期待し、お互い厳しい目を向けてしまう。(30代)

〔取材・文・イラスト 藤田和香子〕

武蔵野市立男女平等推進センター「ヒューマンあい」ご利用案内
 〒180-0022 武蔵野市境2-3-7 市民会館1階 開館時間：午前9時～午後10時(木曜・年末年始 休館)
 電話：0422-37-3410 FAX：0422-38-6239 Eメール：danjo@city.musashino.lg.jp

『まなこ』は文字通り「眼」。人やまちや文化や地球を、男女平等推進の視点＝「まなこ」で見ている！という思いで名付けられました。1991年創刊以来、市民が企画・編集にかかわっています。

性の多様性を理解し尊重する意識・体制づくりのための取り組み



市では、「性の多様性を理解し尊重するまち武蔵野市宣言」を行い、取り組みを進めています。今年度は、実務者研修を実施し、一人ひとりの多様性を認め合い尊重し合う職場や地域をつくるために、今私たちがしなければならないことは何かについて、専門家による講義を通し理解促進・意識啓発を行いました。

また、パートナーシップ制度導入について、市長からの諮問を受け、男女平等推進審議会にて検討を進めました。1月以降は、各コミュニティセンターで説明会を行っています。

「アライ」って何だ？

～多様性を認め合い尊重し合うために私たちにできること～

日時 令和3年2月9日(火)

場所 市役所802会議室

講師 埼玉大学基盤教育研究センター 准教授 渡辺 大輔 さん



『まなこ』創刊から30年を迎えました

1991年2月に創刊した『まなこ』は、多くの市民の皆様を支えられ、30年の節目を迎えました。

これまで支えてくださった皆さまありがとうございました。今後も「なるほど!」と思って頂ける内容をお届けしたいと思っております。

どうぞよろしく申し上げます。

『まなこ』スタッフ一同



家族の絶妙な距離感とは…

曲淵かほり ● 境

自宅にいる時間が増えた家族から、細かい指摘を受けるようになった。落ち着いて見てみると家中のいろいろなことが気になるのだ。反省すべきところは反省した上で、「その気持ちややつ分かってくれた?」と余計な一言を言いたくなる気持ちをぐっと握る。と、ここまで来て、日ごろ私に細かいことを指摘される家族の気持ちに、ようやく気付いた。家庭の指揮官としての手腕を試されているような、そんな気分にもなる今日この頃である。

こうあるべき、をやめてみたら

鈴木千明 ● 緑町

コロナによる休校期間は小学生の娘たちと家にもつていました。生活リズムは守るべき、と一日中小言ばかりで気持ちほとんどん負のスパイラルに。これでは駄目だと、就寝時間だけを守り他は目を放すことにしました。生活は荒れ放題でしたが、「こんな時だからいいか」と思うよう努めたら予想以上に気楽に過ごせました。勉強もできたとは言えず親としては失格かもしれませんが、心も身体もなんとか元気に乗り切れたので合格点だと思っています。

マスクなしで過ごすひと時

篠原泰子 ● 中町

朝、家を出てからずっとマスクを着けている生活が続いている。帰宅してマスクを外す瞬間、安全地帯に戻ってきたようにほっとする。家庭内の人数が増えれば感染リスクも高まるし、家族で過ごす空間も安全なものではないとわかってはいるが、夫と子どもと囲む食卓の距離が嬉しい。今まで当たり前すぎて意識していなかったけれど、マスクを外して話ができる間柄、表情を見たいと思える人が側にいることのありがたみを感じる日々である。



『まなこ』サポーターの200字コラム
コロナ禍の家族関係に思うこと

* STAFF *

- サポーター 秋山茉莉奈 麻生明子 岡田正樹 佐々木直美 篠原泰子
 鈴木千明 丹内まゆみ 曲淵かほり
 取材・編集 小西美穂子 島崎理恵 藤田和香子 若林優香
 武蔵野市男女平等推進センター担当職員
 編集協力 栗原毅
 表紙デザイン ふじわりわ
 レイアウト 上田ジュンコ
 印刷 PICOプリンティングイン株式会社

『まなこ』は市役所、市政センター、図書館、コミュニティセンター、駅、医療機関、理美容院、大型店舗、金融機関、おふろやさんなど市内の約490か所に置いてあります。バックナンバーをご希望の方は、男女平等推進センター「ヒューマンあい」まで。

*配布は、公益社団法人武蔵野市シルバー人材センターのご協力を頂いております

市ホームページでもバックナンバーをご覧いただけます。

武蔵野市 まなこ



Editors' Notes 編集 * 後記

コロナ禍は、自分の優先順位を明確にさせるという側面もあるように思う。「らしさ」などを気にする余裕もなくなった。「年甲斐」という縛りからも脱して楽しく過ごしていきたい。
 (小西美穂子)

自粛期間、リモート授業や会議をしている家族に遠慮して、息をひそめて家事をしていた。夜は楽しいだらんらんがあった。距離が近く何も言わなくても通じていた。今はまた、連絡を密にしようという互いに気をつけている。
 (島崎理恵)

高齢の親の通院に付き添っている。感染症対策で緊張感のある職場なのに、スタッフのみなさんがいつも笑顔で優しく接してくださり、感謝の気持ちでいっぱいです!
 (藤田和香子)

夫の在宅勤務がずっと続いている。食事の準備など家事負担が増えたり、初めは戸惑いもあったが、ようやく慣れてきた。家族と一緒に過ごす時間も増え、家族の新たなステージのように感じている。
 (若林優香)

◎綴じ込み返信はがきで、ご意見やご感想をお寄せください。次号は、2021年7月発行予定です。